The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	とりたて詞のもつ焦点素性の介在効果 ： 「も」「さえ」「まで」を中心に
Author(s)	榎原, 実香
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2019, 2018, p. 11-20
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72704
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

とりたて詞のもつ焦点素性の介在効果
—「も」「さえ」「まで」を中心に—

榎原実香

1. はじめに

とりたて詞の中には、「も」や「さえ」のような係助詞（山田 1936 他）として分類されるもの、「まで」のような副助詞（山田 1936 他）として分類されるものがあり、係助詞と副助詞、また係助詞同士はお互いに共起可能である。ただし、その接続の順はそれぞれ異なる。

(1) a. あの学生さえまで知っている。
　　b. 太郎までさえ知っている。
(2) a. あの学生さえも知っている。
　　b. *あの学生もさえ知っている。
(3) a. 太郎までも知っている。
　　b. *太郎もまで知っている。

日本語記述文法研究会(編)（2009）によると、とりたて詞の中でも、「も」は不定語と共起することができるのに対し、「さえ」や「まで」は不定語と共起できない。(4)では、「も」が不定語に値を与えるために必要であり、不定語と「も」の共起によって「全て」を意味することができる。

(4) a. どの学生 {も／*Ø} {起きた／起きなかった} 。
　　b. 誰 {も／*Ø} が {起きた／起きなかった} 。

また(5)や(6)では、(a)の文や(b)の文が容認されず、(c)の文は Wh 疑問文としてしか解釈されないことから、「さえ」や「まで」が不定語に値を与えることができないことがわかる。

(5) a. *どの学生さえ {起きた／起きなかった} 。
　　b. *誰さえ（が）{起きた／起きなかった} 。
　　c. ?どの学生さえ起きたの？
(6) a. *どの学生まで {起きた／起きなかった} 。
　　b. *誰まで（が）{起きた／起きなかった} 。
　　c. ?どの学生まで起きたの？

本稿では、不定語との共起から「とりたて詞」として扱われる要素、特に「も」「さえ」「まで」について統語論的な特徴を明らかにすることを目的とする。

2. 「も」と不定語の一致

現代日本語においては、普通名詞や動詞などに「も」が付加すると同じ条件を満たすものが他に存在するという解釈が得られ、不定語と共起すると「全て」を意味することができる。(7)の例では、「も」によって「あの学生」以外の人が想定されるのに対し、(7)の例では「学生全て」が想定される。本稿では、前者を「累加解釈」、後者を「全称解釈」と呼び、これらの「も」が一致において異なるふるまいを見せることを示す。

(7) a. あの学生も知っている。
　　b. どの学生も知っている。

「も」の一致のあり方を分析する上で、本稿では助詞残留を用いる。Saito (2007) では、音韻的に削除された箇所には、素性がすでにチェックされ削除されたある要素の LF コピーが位置していると主張されており、特定の要素の削除が許されない場合、その要素と残された要素には一致関係があるということが指摘されている。(8)のような Wh 疑問文では、「何」のみの削除が許されないことから、「何」と疑問マーカーである「の」が一致関係にあると考えられる。(A_2)において削除された箇所には、「の」との一致のために必要な素性がすでにチェックされてしまった「何」のコピーがあると説明される。

(8) A_1: 太郎は何を食べたの？
　　B_1: りんご。
　　A_2: じゃあ花子は Ø 食べたの？
　　B_2: #みかん。

「も」の付加対象が削除され、「も」のみが残る助詞残留の現象においても、同様の分析が適用される（Sakamoto and Saito 2018）。

(9) A: 太郎、来たの？
　　B: {Ø は／Ø も} 、来ました。

2.1 累加解釈

累加の解釈をもつ(10)の場合、助詞残留の例と、「も」とその付加対象が同時に削除された例では解釈の差は変わらない。ここから、削除された要素と「も」との間に一致関係がないことがわかる。「も」の生起位置としては、青柳（2006）の主張に従い付加構造をとることを提案する。

(10) A: あの学生も起きたの？
　　B: {Ø も／Ø} 、起きました。

(11) [[$_{XP}$ 不定語] も]

(12)、(13)においてこのような累加の「も」と不定語との共起を観察すると、(B_2)のような回答が得られないことから、Yes/No 疑問文としてではなく、Wh 疑問文として解釈されるということがわかる。ここから、不定語は累加の「も」から値を与えられず、疑問マーカーである「の」によって与えられていることがわかる。

(12) A: （他に）どの学生も起きたの？

B_1: 太郎も起きたよ。

B_2: #うん、他にどの学生も起きたよ。

(13) A: （他に）誰を叱った先生も知っているの？

B_1: 太郎を叱った先生も知っているよ。

B_2: #うん、他に誰を叱った先生も知っているよ。

2.2 全称解釈

一方、「誰」「何」「いつ」といった不定語と共起し結びつく「も」は、肯定の述語と共起すると同類のものすべてを肯定するという意味、否定の述語と共起すると同類のものすべてを否定するという意味を表す（日本語記述文法研究会(編) 2009）。

(14) a. どの学生も {起きた／起きなかった} 。

b. 誰も {*起きた／起きなかった} 。[1]

全称の解釈をもつ(15)の場合、(B)において「も」の付加対象が「も」を残して削除されると(A)と同じようには解釈されないのに対し、「も」を含んだ削除は許される。ここから、削除された要素と全称の「も」との間に一致関係があることがわかる。Kishimoto (2001) や Hiraiwa (2005) では、このような「も」によって不定語との素性照合が生じているという。不定語と「も」が素性照合することで全称の解釈が得られることから、本稿では、不定語と「も」の間で生じる一致を主要部の解釈可能素性[iF]によって解釈不可能素性[uF]に値が与えられるものとし、議論してゆく。また、本稿は Hiraiwa (2005) を支持し、一致は主要部がその c-統御内のチェックするべき要素を探し出して行われるということを基本とするため、「も」は主要部位置にあると考えられる。

(15) A: どの学生も起きたの？

B: {#Ø も／Ø} 、起きました。

---

[1] 「誰も」は「が」などの後続が見られない限り、基本的に否定の述語としか共起しない「否定極性」の性質をもつため、否定極性表現（NPI）と呼ばれる。否定極性表現ととりたて詞の「も」とは全く異なる要素であるという見方もあるが、現代日本語で否定極性表現として現れる「誰も」や「何も」は、古典日本語では「何でも」や「誰でも」という意味で肯定述語と共に用いられていた。（cf. 小林 2009）

i) ナニモ一切ノ万物ハ天地ノ気カツクリタスソ（『玉塵抄』35-11 ウ）

ii) ソレホトノ事ハタレモ知タト云心テ笑タソ（『玉塵抄』21-77 オ）

ゆえに、否定極性表現は、不定語と共起する「も」と同じ性質をもつといえる。

(16) [$_{XP}$ 不定語 X+も]

以下のように、全称の「も」は不定語と一致する構造、累加の「も」は不定語と一致しない構造をもつ。(17)において全称の「も」を想定した場合、「太郎を評価した先生も全員来ました」といった回答は得られないことから、Yes/No 疑問文としてしか解釈されないということがわかる。すなわち「も」と一致した不定語は、疑問マーカーである「か」と一致することができないということである。

・全称の「も」: 一致あり

(17) A: 誰を評価した先生も来ましたか。

B: はい。

一方、(18)のように累加の「も」を想定すると、「はい、他に誰を評価した先生も来ました」といった Yes/No 疑問文としては容認されないことから、Wh 疑問文となる。それゆえ、不定語は「も」ではなく「か」と一致するといえる。

・累加の「も」: 一致なし

(18) A: 誰を評価した先生も来ましたか。

B: 太郎を評価した先生も来ました。

(19)の場合、不定語はより近い「か」によって値を付与されるため、「も」は累加の「も」としてしか解釈されない。このように、疑問マーカーが不定語と一致するかどうかは、不定語と共起する「も」の有無や疑問マーカーと不定語との局所性が影響することがわかる。

(19) 誰を評価したか知っている先生も来ました。

2.3 「も」と不定語の一致における焦点要素の介在

「さえ」や「まで」も助詞残留が可能であり、累加の「も」と同様のふるまいを見せるため、累加の「も」と同様に不定語とは一致できない位置、すなわち主要部より外側に生起すると考えたい。

(20) A: 学生さえ起きたの？

B: {Ø さえ／Ø}、起きました。

(21) [[$_{XP}$ 不定語] さえ/まで]

しかし、不定語と一致しないはずの「さえ」や「まで」が介在すると、不定語と「も」は一致しにくくなる。(22)や(23)は、記述的な観点からは不定語に値を与える全称の「も」

と、「さえ」や「まで」が共起している例であると考えても問題ないはずであるが、不定語と「さえも」や「までも」が共起した場合、「も」は不定語に値を与えることができず、(a)は非文、(b)の文は累加の解釈しか容認されなくなる。

(22) a. *どの学生さえも {起きた／起きなかった} 。[2]

b. ?どの学生さえも起きたの？

(23) a. *誰までもが {起きた／起きなかった} 。[3]

b. ?誰までも起きたの？

上記の構造を適用すれば、(24)では「さえ」や「まで」が付加構造をとれない位置に生起するということになり、(24)が生成されえない構造であることが明らかとなる。

(24) a. *どの学生さえも起きた。

b. *[$_{XP}$ 不定語 さえ/まで X+も]

これを累加の「も」として解釈すれば、とりたて詞は問題なく付加構造をとることができ、Wh 疑問文として解釈されうる。このように、「も」の構造を二種類設定すれば、「不定語+さえも/までも」が全称の表現として容認されないことが説明される。

(25) a. ?どの学生さえも起きたの？

b. ?[[$_{XP}$ 不定語]さえ/まで + も]

c. [[[どの学生]さえも]起きたの]？

しかし、(26)のように不定語をもつ連体節の主名詞句に「も」が後続する平叙文の場合、「も」を全称として解釈しても、構造的には問題がないと考えられるが、「さえ」が連体節内に介在すると、容認度が下がることがわかる。(27)の(b)のような疑問文においては、「も」は全称の解釈が得られにくく、累加の解釈であっても、「まで」が介在していない場合と比べると、容認度が下がることがわかる。

(26) a. どの学生を誘ったパーティーも人気だった。

b. ??どの学生さえ誘ったパーティーも人気だった。

(27) a. A: 誰が書いた本も売れないの？

---

[2] 「不定語+さえも」が容認される例として以下のような例があげられるが、(iii)は主格のマーカーをもった要素が主語位置にあるため、コピュラや疑問マーカーである「か」が省略されている例であると考えられる。このような構造がどのようにして生成されるのか、また「か」がなぜこの場合に省略可能なのかに関する議論は、別稿に譲りたい。

iii) 誰が誰（だか）さえもわからない。

[3] 「不定語+までも」が容認される例として以下のようなものがあげられるが、(iv)のような「まで」は、同一文中に「から」が見られることから、沼田（2009）に従えば順序助詞の「まで」であり、極限を示すようなとりたて詞ではない。

iv) 誰から誰までも感謝しています。

B_1: うん、売れないなあ。（全称解釈）

B_2: 加藤が書いた本も売れないなあ。（累加解釈）

b. A: ??誰まで書いた本も売れないの？

B_1: ??うん、売れないなあ。（全称解釈）

B_2: ??加藤まで書いた本も売れないなあ。（累加解釈）

次節では、このような例を出発点とし、「さえ」「まで」をはじめとしたとりたて詞のもつ焦点要素の介在効果を「も」や「か」と不定語との一致関係から明らかにする。

3. 焦点素性の介在効果

3.1 焦点素性と一致

「も」はとりたて詞として文中の要素の焦点性を示す機能をもつことから、本稿では「も」をもつ句は共通して[+FOCUS]素性[4]を有する（青柳 2006 他）と考える。Beck (2006) においても、不定語と焦点素性をもつ要素とが関連することが主張されており、とりたて詞のもつ[+FOCUS]素性と同様のものであると考える。Beck (2006) や Tomioka (2007) では、不定語が LF において移動する場合、焦点素性の介在が移動を阻止することを主張している。本稿では不定語の LF 移動は否定しないが、その移動は不定語と「も」や「か」といった要素の局所的な一致のために生じているとし、顕在的な位置関係でもって日本語の介在効果（cf. Hoji 1985）の例に説明を与える。(28)の(b)の文では、「も」をもつ句が「誰」と「の」の間に介在していることによって容認度が下がることがわかる。

(28) a. [誰が[[太郎も誘っ]た]の]？

[+FOCUS]

b. ??[[太郎も[誰が[誘っ]た]]の]？

[+FOCUS]

「さえ」においても(29)のように同様の現象が見られるが、「も」と同様に[+FOCUS]素性をもつということがこの原因だと考えられる。このように、[+FOCUS]素性をもつ要素の一致が生じるとき、とりたて詞のもつ[+FOCUS]素性の介在によって容認度が下がるということが明らかである。

(29) a. [誰が[[太郎さえ誘っ]た]の]？

[+FOCUS]

[4] 焦点（Focus）の定義に関しては、様々に議論されているが、本稿では、Vallduví (1992, 1995) を参考にする。[+FOCUS]素性とは、話し手、もしくは聞き手の既知情報に対して変項になる要素を示す素性であるとし、考察を進める。なお、Vallduví (1992, 1995) では、いわゆる狭義の統語論（Narrow Syntax）とは異なる情報構造をもち、情報構造において焦点が機能することを主張しているが、本稿では、情報にかかわる操作も狭義の統語論において計算されるとし、議論を進める。

b. ??[[太郎さえ[誰が[誘っ]た]　]の]？
[+FOCUS]

以上の観察から、「さえ」や「まで」といったとりたて詞も[+FOCUS]素性をもち、その介在が[+FOCUS]素性をもつ他の要素の一致を妨げるということを主張する。

3.2　「さえ/まで」による介在効果

「も」に累加の解釈がなされ、Wh 疑問文となる場合、(30)と比較すると、(32)は「まで」の介在によって容認度が下がる。「まで」が加わると(33)のような構造が予想されるが、不定語と「の」の間には累加の「も」に加え[+FOCUS]素性をもつ「まで」が介在するということになり、それゆえ容認度が下がると考えられる。

(30) A: ?太郎がどの学生を誘ったパーティーも盛り上がったの？
B: 新入生を誘ったパーティーです。

(31) ?[[[太郎が[どの学生を]誘ったパーティー]も]盛り上がったの]？
[+FOCUS]

(32) A: ??（太郎が）どの学生まで誘ったパーティーも盛り上がったの？
B: #新入生まで誘ったパーティーです。

(33) ??[[[太郎が[[どの学生]まで]誘ったパーティー]も]盛り上がったの]？
[+FOCUS]　[+FOCUS]

「も」が全称の解釈をもち、Yes/No 疑問文となる場合も同様に、(35)では不定語と「も」との間に[+FOCUS]素性をもつ要素の介在が見られないため、不定語と「も」は問題なく一致するが、(37)のように「さえ」が介在すると全称の解釈が得られにくくなる。このように、特に「さえ」や「まで」の介在によって、[+FOCUS]素性をもつ要素同士の一致が阻まれていることが明らかである。

(34) A: 太郎がどの学生を誘ったパーティーも盛り上がったの？
B: はい、盛り上がりました。

(35) [太郎が[どの学生を]誘ったパーティーも]盛り上がったの？

(36) A: ??（太郎が）どの学生さえ誘ったパーティーも盛り上がったの？
B: #はい、盛り上がりました。

(37) ??[太郎が[[どの学生]さえ]誘ったパーティーも]盛り上がったの？
[+FOCUS]

「さえ」が構造的に介在要素とならない(38)の場合、Wh 疑問文の解釈は難しいが、全称の解釈が可能であることから、介在要素は顕在的な構造の中で見られることがわかる。

(38) A: 太郎がどの学生も誘ったパーティーさえ盛り上がったの？

B: はい、盛り上がりました。

(39) [[太郎が[どの学生も]誘ったパーティーさえ]盛り上がったの]？

[+FOCUS] [+FOCUS]

3.3 「さえ/まで」と「も」の局所的併合

本節では、構造的には容認される「さえ/まで」が累加の「も」と隣接し、不定語と共起する例について、[+FOCUS]素性の介在という観点から検討していく。「さえ」が介在した(41)や「まで」が介在した(44)はいずれも「うん、起きた／誘った」といった回答がより困難であることから、Wh 疑問文としてしか容認されない例である。累加の「も」として解釈された場合、「さえも/までも」が[+FOCUS]素性を有する要素として介在するためにとりたて詞が現れない場合と比べ、容認度が落ちるということがわかる。

(40) A: どの学生が起きたの？

B: 太郎が起きたよ。

(41) A: ?どの学生さえも起きたの？

B: ?太郎さえも起きたよ。

(42) *どの学生さえも起きなかった。

(43) A: 太郎は誰を誘ったの？

B: 花子を誘ったよ。

(44) A: ?太郎は誰までも誘ったの？

B: ?花子までも誘ったよ。

(45) *太郎は誰までも誘わなかった。

(46) a. ?[[[どの学生]さえも]起きたの]？

[+FOCUS]

b. ?[太郎は[[誰]までも]誘ったの]？

[+FOCUS]

最後に、全称解釈の「も」と「さえ/まで」が隣接する文を検討する。「もさえ」と「もまで」の並びは現代日本語では見られにくいが、本稿で提示した構造においては、「も」が全称解釈となった場合には容認されてもいいはずである。(47)が容認されないのは、「どの学生も」が「学生全て」という集合全体を表すのに対し、「さえ」は集合の中の一要素を際立たせる機能をもち、意味機能が矛盾するためであると考えられる。ただし、「不定語+も」が(48)のような限られた範囲において用いられるような文脈では容認されることがあるため、文法的には問題のない例であるとも考えられる。

(47) a. *どの学生もさえ誘ったパーティー

b. [[どの学生も]さえ]誘ったパーティー

(48) a. 誰も、家族の誰もさえ、この世界には入れないもの。（https://www.egami.ne.jp/hiroko/%E5%81%A5%E5%BA%B7/2009/09/%E3%83%90%E3%83%AC%E3%82%A8to%E8%85%B0%E7%97%9B.html）

b. [[家族の誰も]さえ]

4. まとめ

以上、「も」「さえ」「まで」の生起位置、これらのもつ[+FOCUS]素性から、とりたて詞と不定語との一致関係が説明されることを示した。生起位置に関しては、「も」が全称の解釈となる場合主要部に位置すること、累加の解釈となる「も」や「さえ」「まで」は付加構造をとることを示した。構造をまとめると以下のようになる。「不定語+さえ+も」から全称の解釈が得られないことは、以下の構造から明らかである。

・累加の「も」

(49) a. [[$_{XP}$ 不定語]さえも]

b. *[[$_{XP}$ 不定語]もさえ]

・全称の「も」

(50) a. [[$_{XP}$ 不定語 X+も]さえ]

b. *[$_{XP}$ 不定語 さえ X+も]

また、[+FOCUS]素性に関して、不定語と、「も」や疑問マーカーといった主要部の要素との間に[+FOCUS]素性をもつとりたて詞が介在すると、それらの一致が阻害され、容認度が下がることを示した。

(51) a. ^{OK}[$_{XP}$ [不定語] X+Q$_{[+FOCUS]}$]

b. ?/??[$_{XP}$ [[不定語] T$_{[+FOCUS]}$] X+Q$_{[+FOCUS]}$]

c. ??[$_{XP}$ [[[不定語] T$_{[+FOCUS]}$] T$_{[+FOCUS]}$] X+Q$_{[+FOCUS]}$]

また、特に不定語と「も」との一致において、「さえ」や「まで」が強い介在効果を示すことが明らかとなったが、なぜ「か」と「も」の間で容認度に差が出るのかに関して、今後より詳細にデータを分析し、明らかにしていきたい。

本稿における主な考察対象は「も」「さえ」「まで」であったが、「こそ」や「は」の介在も、不定語との一致にかかわる。ただし、これらは「も」との共起が許されていない要素であることから、より慎重に議論する必要があるだろう。今後、とりたて詞全体が生じる現象に統一した説明がなされることが求められる。

(52) a. *誰こそ代表にふさわしい。

b. ??誰こそ代表にふさわしいの？

(53) a. *誰は代表にふさわしい。

b. 誰は代表にふさわしくて誰はふさわしくないの？

参考文献

青柳宏（2006）『日本語の助詞と機能範疇』東京：ひつじ書房.

Beck, Sigrid (2006) Intervention effects follow from focus interpretation. *Natural Language Semantics* 14: 1-56.

Hiraiwa, Ken (2005) Indeterminate-agreement: Some consequences for the Case system. In: Ken Hiraiwa and Joseph Sabbagh (eds.) *Minimalist approaches to clause structure*, *MIT Working Papers in Linguistics* 50, 93-128. Cambridge, MA: MIT.

Hoji, Hajime (1985) *Logical form constraints and configurational structures in Japanese*. Doctoral dissertation, University of Washington.

Kishimoto, Hideki (2001) Binding of indeterminate pronouns and clause structure in Japanese. *Linguistic Inquiry* 32: 597-633.

小林茂之（2009）「日本語否定一致表現の文法化について」『学苑』821: 66-75.

日本語記述文法研究会(編)（2009）『現代日本語文法 5　第 9 部とりたて　第 10 部主題』東京：くろしお出版.

沼田善子（2009）『現代日本語とりたて詞の研究』東京：ひつじ書房.

Saito, Mamoru (2007) Notes on East Asian argument ellipsis. *Language Research* 43: 203-227.

Sakamoto, Yuta and Hiroaki Saito (2018) Overtly stranded but covertly not. In: Wm. G. Bennett, Lindsay Hracs, and Dennis Ryan Storoshenko (eds.) *Proceedings of the 35th West Coast Conference on Formal Linguistics*, 349-356. Somerville, MA: Cascadilla Proceedings Project.

澤田美恵子（2007）『現代日本語における「とりたて助詞」の研究』東京：くろしお出版.

Tomioka, Satoshi (2007) Intervention effects in focus: From a Japanese point of view. In: Shinichiro Ishihara, Svetlana Petrova, and Anne Schwarz (eds.) *Interdisciplinary Studies on Information Structure (ISIS) 9*, *Working Papers of the SFB* 632, 97-118. Potsdam: Universitätsverlag Potsdam.

Vallduví, Enric (1992) *The informational component*. New York: Garland.

Vallduví, Enric (1995) Structural properties of information packaging in Catalan. In: Katalin É. Kiss (ed.) *Discourse configurational languages*, 122-152. New York: Oxford University Press.

山田孝雄（1936）『日本文法學概論』東京：宝文館.